

# 未公開の船ヶ谷式土器群をめぐる基礎的研究(1) －標式の粗製深鉢群を対象とした再検証と新たな視点－

幸泉満夫・岩田堯之・奥田七夏・白鳥嶺・近藤拓弥

## 1. はじめに

愛媛県松山市に所在する船ヶ谷遺跡出土の縄文土器群は、西部瀬戸内周辺における縄文時代晚期中葉(または晚期後半)の指標として、さらに後続する刻目突帯文期についても、その成立に関与し得る有力候補の一つとして、広く注視されてきた。しかしながら、当該遺跡は遺物の包含密度が高く、出土量が膨大であったため、今なお、出土土器群の図示公開は一部に限られている。このことを忘れてはならない。なかでも砲弾形を呈する素口縁深鉢の実態は、未だ、藪の中といつても過言ではないだろう。

1975年の愛媛県教育委員会(以下、県教委)による緊急発掘では、当該資料群が、包含層(第IV層前後)中より膨大に得られた。そして1984年に刊行された県の報告書では、うち、編年指標として活用されやすい有文(素文)、黒色磨研等の大型口縁部片や底部片の一部を中心に、公開が果たされている(阪本編1984)。のち1989年には、道後平野周辺における晚期土器編年を展望した宮本一夫(以下、敬称略)により、「船ヶ谷式」の型式設定が成された(宮本編1989,p83)。さらにその後、栗田茂敏が大渕遺跡第1・2次調査の成果を考察した際には再度、この船ヶ谷資料群が丹念に実測整理されており、大幅な追加公開に至っている(栗田編2000)。以上の基礎報告や考察の数々により、今日、船ヶ谷土器群は瀬戸内周辺における晚期土器型式の要として、広く認識されるようになったのである(犬飼2015、坂口1995、中野編2005、平井(泰)2009、幸泉2019a・2020ほか)。

けれども、上述の通り、出土土器群の全貌は未だ充分には明らかにはされていない。そこで第一弾となる本稿では、船ヶ谷式深鉢に関する積極的な追加公開を目的としたい(写真1)<sup>1)</sup>。併せて、それらの編年的位置や製作技法上の独自性についても、若干の考察を試みることとする。

## 2. 出土遺物の観察所見

対象資料は、報告が1984年と比較的古いため、県文化財保管庫でA・Bランクの報告資料群とCランク以下の未公開資料群が未分離のまま、一括収納されてきた<sup>2)</sup>。個々の資料の出土層位等については、注記情報を頼りに学生間で集計を行ったが、結果「第3(またはⅢ)層上部」(報告書の第IV層)が圧倒的という知見に留まっており、資料群の年代差等を出土層位から復元することまでは叶わなかった<sup>3)</sup>。

以下、(1)谷尻系深鉢・鉢、(2)無文系深鉢・



写真1 未公開船ヶ谷資料の実測作業風景  
(愛媛大学法文学部内)

◎ KOIZUMI Mitsuo 愛媛大学法文学部 准教授  
IWATA Takayuki 愛媛大学法文学部 卒業生  
OKUDA Nana SHIRATORI Rei KONDO Takuya

愛媛大学法文学部 学部生

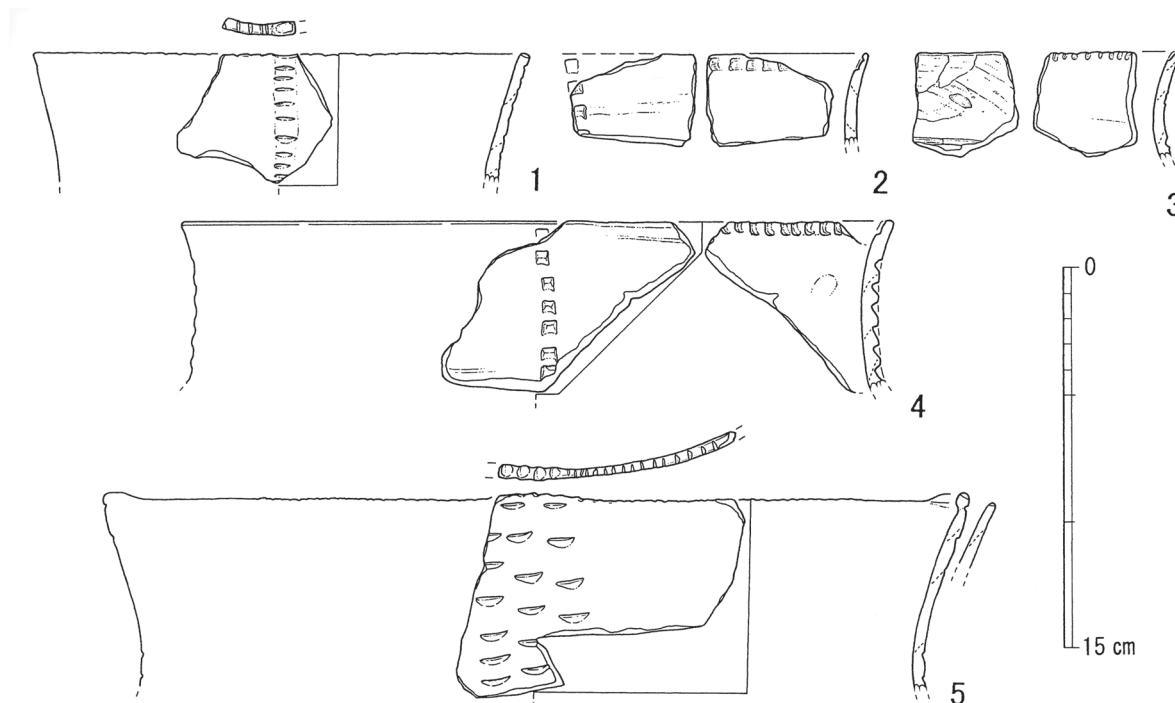
鉢、(3)突帯文系深鉢・鉢、(4)胎土・色調の順に、各々の観察所見を記そう。

### (1) 谷尻系深鉢・鉢

第1図は、口・頸・胴部の各々に押引刺突等の素文を施す、いわゆる谷尻系の深鉢・鉢である(平井(勝)1988、平井(泰)2009、幸泉2019a・2020)。1は頸部に一列の幅狭い爪形D字文を連續施文する例で、比較的強い押圧のため、施文部が若干縦位に凹んでいる。口唇部にも同等の鋭いD字刻が付されるほか、頸部縦列文との合流点には痕跡的な杯状の横長凹点文が加わる。頸胴部界域は不明瞭であるが、口辺部は直線的に緩く外反している。幸泉が提唱するStage22(晩期中葉中相)の後半、プレ谷尻系Ⅲ式に該当しよう(幸泉2020)<sup>4)</sup>。

2～4は口頸部が強く外反し、その内縁端部に刺突を加える一群である。うち2・4の頸部には縦位の略正方形を成す刺突文が連續する。いずれも内縁刺突と同じ角頭状工具による。頸胴部界域が残る3には一条の浅い横走沈線が認められ、新しい傾向を示唆している。内縁の刺突も小振りであり、型式学上の退化傾向を示唆していると判断できるだろう。以上はStage23(晩期中葉新相)、幸泉の谷尻系Ⅰ式と同Ⅲ式に各々該当しよう(幸泉2020)。なお、3の頸部外面のケズリ調整面には種子状の圧痕が認められた。現在、レプリカ・セム法を用いた分析を同時併行で進めしており、もし新たな成果が得られるようなら、別途速報したいと考えているところである。

5は、中部瀬戸内の谷尻Ⅰ式そのものと認定してよい個体である(幸泉2020ほか)。器厚4～5mmと薄く、色調も異例の「にぶい黄褐色」を呈することから、外来系と推認できる。頸部には大振りで、上弦弧状の三日月状を成す爪形文が三列、各々間隔を空けながら丁寧に刺突されている。



第1図 船ヶ谷遺跡出土の未公開等深鉢・鉢(1)

また口唇部にもD字状刺突が間隔を空けて付されているが、うち波頂部では低平化した突起部を設け、その上縁のみに限定してやや幅広のD字刻を、さらに内縁には、比較的浅い段成形が維持されている。

以上の谷尻系深鉢・鉢の成形法は内傾接合を基調とするが、第1図2のみは外傾接合を採る。器面調整はナデ、または二枚貝条痕後ナデを基本とするが、3については口縁部の外器面にケズリ調整を残しており、後述する在来の無文系粗製深鉢・鉢の製作技法に近いといえよう。

## (2)無文系深鉢・鉢

つづく第2図では、従来未報告のままであった無文系深鉢・鉢の一部を掲げた。うち6については、口縁部外面にのみ太く粗い二枚貝条痕を明瞭に残している。古閑II式由来の可能性も否定はできないが、頸部以下のケズリ調整は他の無文系粗製深鉢と類似するため、ひとまず無文系に含めて扱った。

7~10・12は頸部が強く外反するI-1-⑧・⑨形、またはI-2-⑥~⑧形(幸泉2017,p60参照)を呈する薄手の一群である。小片のため、その一部は本来、先の第1図で示したように、頸部に縦位の押引刺突や爪形文、あるいは頸脣界域に沈線や刻目等を伴う可能性も否定できない。口唇部の刻目は、7が口唇上の纖細な斜位R刻と半截竹管逆手による内縁の波動文(幸泉2019ab)、8は内縁のみに同等の半截竹管逆手による波動文を、また9は口唇部内縁に角槌状の小さな刺突を連続させている。対する10以降は、刻目が口唇上に付される一群である。10・12は口唇上に甘く浅い略D字状の押引刺突を付している。成形は全て内傾接合である。次に示す砲弾形の粗製深鉢群と比較するならば、いずれも器面調整が丁寧である点で、先述の谷尻系統に近しいともいえるだろう。

第2図11・13~30は、口唇部に押引刺突等の刻目を付す無文系K類型の砲弾形深鉢・鉢である(幸泉2017,p60-61)。第2図17等に示される通り、口辺部が直行するII-⑦形(幸泉2017,p60)を主流とするが、第2図14・21・23・26・28~30のように、口縁部が若干内弯するII-③形、ないしII-⑫形(幸泉2017,p60)も確認できる。後者の内弯口縁は、後述する無文系M類型の砲弾形深鉢・鉢に通有の器形であり、両者の融合型とみることもできよう。

これら口唇部の刻目は、全て口唇上に付されている。先の一群のように内縁を刺突する例はない。それらは図示するように、ヘラ状工具で浅くD字、ないし逆D字状に押引くタイプが主勢を占めるのだが、なかには12・19・28のような幅1mm強の纖細な直刻、23のような連続ユビ押引刻、あるいは21・26・30のように太く明瞭なV字刻を施す例が、バリエントとして認められる。

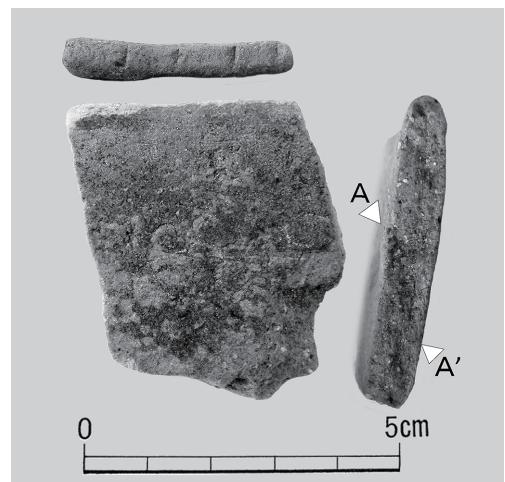
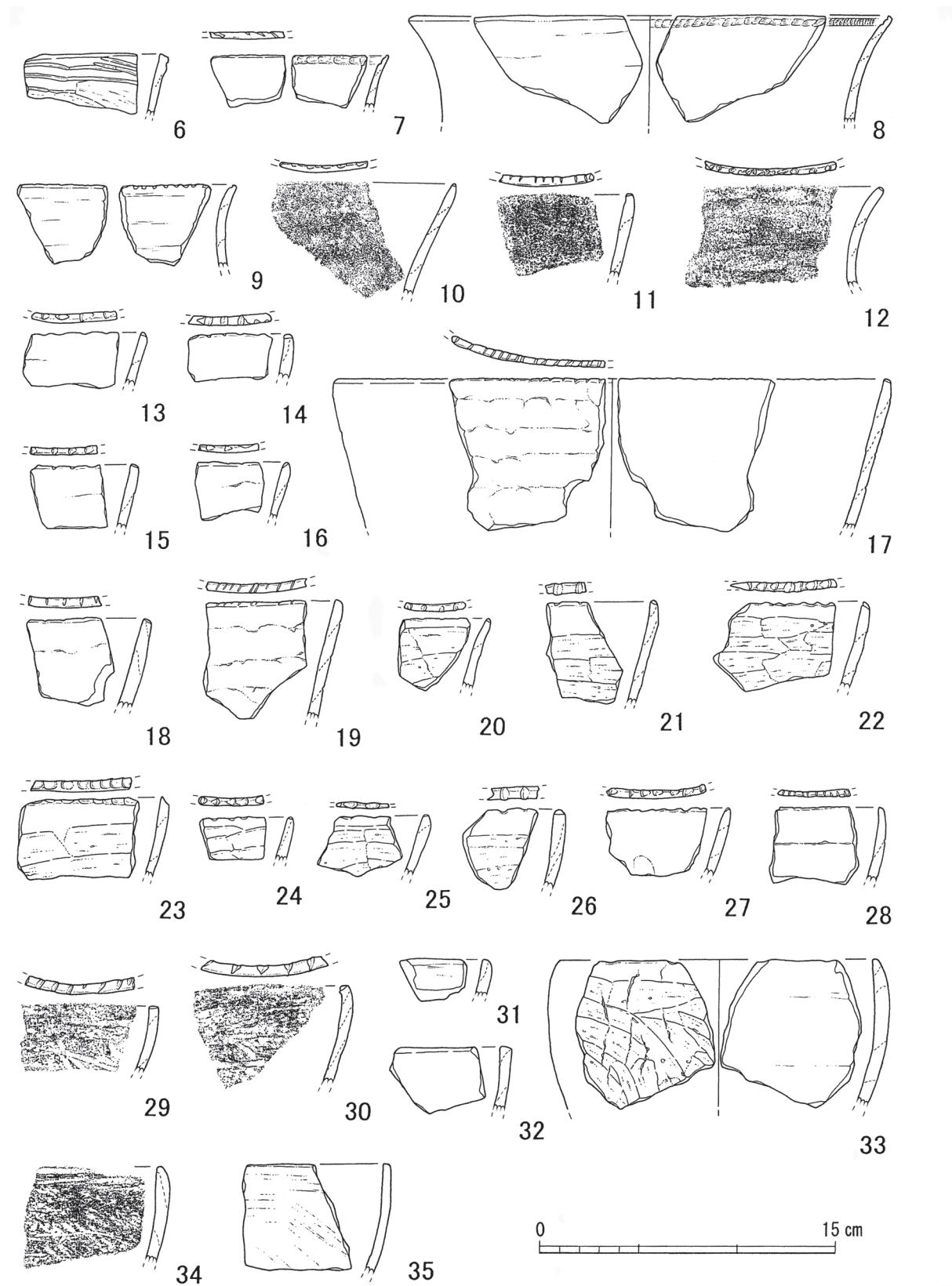


写真2 外傾接合を示す稀有な無文系深鉢  
(船ヶ谷出土;第2図18)



第2図 船ヶ谷遺跡出土の未公開等深鉢・鉢(2)

以上的一群の成形もまた内傾接合を原則とするが、第2図18のみは外傾接合を示している点で特異である(写真2)。器面調整は、粗いナデ地に横位の接合痕を残す第2図11・13・15～19のようなタイプと、口縁端部の外面直下に1～2cmほどのナデ調整帯を残し、以下を粗く横位基調に削る20～26のようなタイプを主流とする。もっとも、29・30のように口辺部外器面にケズリ調整を加えた後、横位～斜位の太く粗い二枚貝条痕を加えて仕上げる例や、数は少ないものの、14・27のようにナデ調整のみで仕上げた可能性のある個体も存在している。

第2図31～35は口唇部に刻目等を付さない無文系M類型(幸泉2017,p61ほか)の砲弾形深鉢・鉢である。先述の通り、口縁端部を若干内弯させるII-③形、ないしはII-⑫形が多い。成形は内傾接合を原則とするが、第2図34のように外傾接合を示す個体も極少量ながら混在する。外器面の調整は31・32がナデ、33が口縁端部直下にナデ帯を残す横位～斜位のケズリ調整、外傾接合を示す34はケズリ調整後に粗い二枚貝条痕を、35は二枚貝条痕後ナデによって仕上げられている。図示するように、33の外器面には複数の縦皺痕が看取できる。

### (3) 突帯文系深鉢・鉢

第3図には、広義の突帯文系統に属する深鉢・鉢を纏めた。

36・37は無刻目突帯文の深鉢・鉢口縁部片である。いずれも口縁端部より1cm程度下がった位置に断面三角形状の突帯を貼り付けている。36が低平な蒲鉾状を示すのに対し、37は隆高5mmと鋭く、比較的明瞭な独立隆帯を成す。口辺部はともに外反するが、36の弯曲が相対的に強く、また端部を薄く仕上げるなどの差異も看取できよう。口唇上には36が淡く浅いD字状押引を、37は浅い略逆D字状の押引刺突を付す。成形はともに内傾接合で、器面はナデによって仕上げられている。

第3図38は、その重要性を鑑み、栗田編2000年報告のNo.1265を再実測したものである。一見、古相の刻目突帯文土器を彷彿とさせるが、D字状を成す鋭い刻目列は、断面が二等辺三角形様を成す突帯の上縁側に付される点で、決定的に異なる(写真3)。三角突帯は、先の無刻目突帯と同じく口縁端部より約1cm下がった位置に鋭く、明瞭に設けられている。また、口唇上には浅く淡いD字状の押引刺突が付されるほか、その内縁側にも、約5mm下がった位置に、竹管状丸頭工具による列点状の押引刺突が加えられている。頸胴部界域が屈曲し、比較的鋭い稜線を形成するが、その器面調整は頸部上半を横位ケズリ、同下半をナデとし、胴部には、該期の西部瀬戸内で特徴的な粗い搔取り状を成す二枚貝条痕が明瞭に残されている。

第3図39は平坦に整形された口唇部の外縁に、ヘラ状工具を用いて、纖細なV字状刻を付す個体である。分類上、無文系K類型に含めたが、「刻

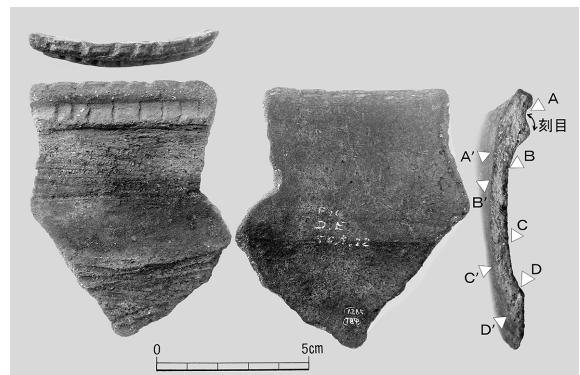
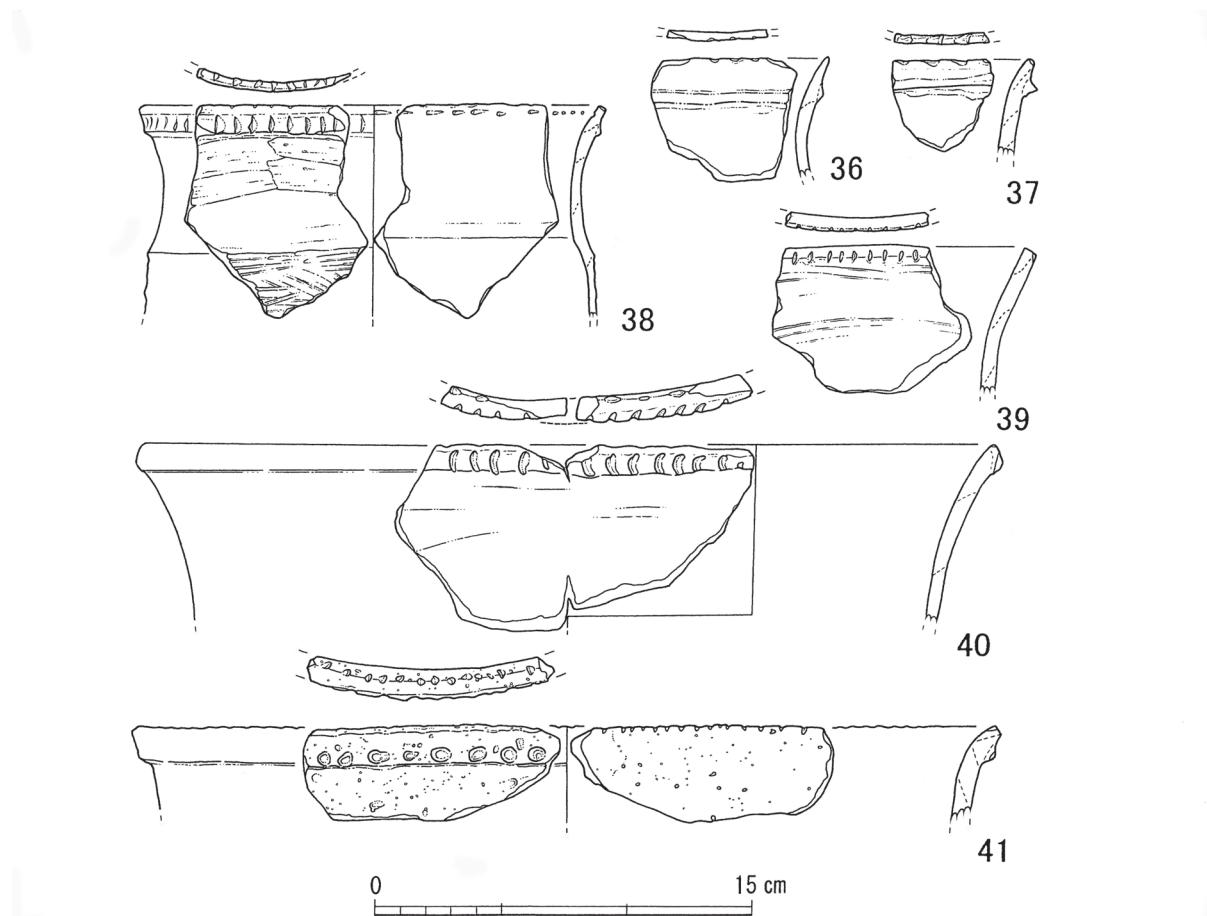


写真3 刻目突帯文成立に関与する土器  
(船ヶ谷出土:第3図38)



第3図 船ヶ谷遺跡出土の未公開等深鉢・鉢(3)

「目突帯文」との絡みから、その成立に関与する一派の可能性がもたれる。器形は、口辺部が緩やかに外反する深鉢形であり、器厚6mmと、船ヶ谷深鉢群のなかでは多少厚手である。器面は、内外とも二枚貝条痕後ナデによって仕上げられている。

第3図40・41は刻目突帯文深鉢である。うち41は栗田編2000年報告のNo.1261を再実測したものである。40は、口縁端部に沿い断面蒲鉾状の突帯を一条貼付け、そこに半截竹管状工具によってC字状爪形文を連続施文する例である。口唇上にも別途、淡く浅い略D字状の押引刺突が加えられており、先の無文系K類型とは時期的に近接する可能性が高いことを暗示している。近年、幸泉が提起した神谷川式の一派、ないしはその亜流型式を示す可能性が想起されよう。器形は口辺部が緩やかに外反するもので、外器面は二枚貝条痕後ナデによって仕上げられている。41もまた、口縁端部に沿い断面二等辺三角形様の突帯が一条巡らされるタイプで、突帶上には、

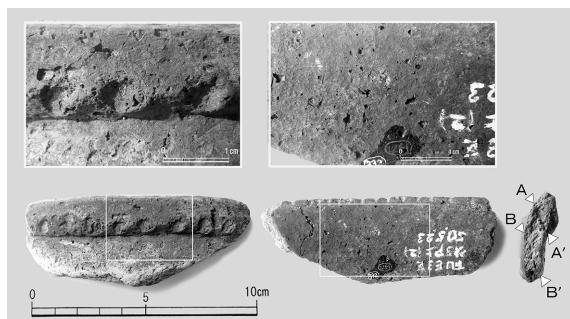


写真4 刻目突帯文期のアバタ土器  
(船ヶ谷出土:第3図41)

ユビ押引による浅い略円形の刺突文が左回りに連続施文されている。また口唇部には面取り調整が成され、その端部内縁側にも略D字状の淡く、浅い押引刺突が加えられている。

これら突帶文系深鉢・鉢もまた内傾接合を原則とするが、うち、41のみは外傾接合により成形されている(写真4)。この41は胎土中に有機物を多量混和する「アバタ土器」であり(幸泉2017,p79・2018)、九州方面に由来する外来系土器と見做すことができよう<sup>5)</sup>。

### 3. 製作技法等に関する若干の補足的考察

今回紹介してきた深鉢群には、成形、調整、胎土、色調の面で幾つかのバリエントが窺える。以下、第1～3図掲載の深鉢・鉢全点を対象に、若干の分類と考察を施しておきたい。

まず成形であるが、接合法は内傾接合97%、外傾接合3%で、前者が圧倒的多数を占めた<sup>6)</sup>。器厚は4～5mmが55%、6mm 34%、7mm 11%で、4～6mmが全体の9割弱に達する<sup>7)</sup>。さらに外器面の最終器面調整では、条痕後ナデ等を含む最終ナデ仕上げが48%、二枚貝条痕が27%と主流で、他にケズリ、搔取り、ミガキ調整を示す例が各数%ずつ伴うことも判明した<sup>8)</sup>。

つぎに胎土であるが、ここでは「粒径3mm以下または2mm以下で赤色斑粒を含むタイプ」、「粒径2mm以下で石英・長石・金雲母などを含むタイプ」、「粒径1mm以下で石英・長石・花崗岩などを含むタイプ」、「粒径2mm以下の赤色斑粒を含むタイプ」、「粒径1mm以下で有機物の混入が認められるタイプ」の5パターンを確認できた<sup>9)</sup>。なお道後平野という立地環境を鑑み、結晶片岩を含む個体の有無については特に注意を払ったが、認定可能な個体は、今回の資料群中には全く存在していない。以上から、標式の船ヶ谷式粗製深鉢については、領家帯を起源とする花崗岩・長石・石英・水晶、ならびに金雲母粒いずれかのコンポジションから成り立つ個体が圧倒的に多いと結論付けられる。さらにその組合せにより「石英+長石」、「石英+長石+花崗岩」、「石英+長石+金雲母」といった類型化も可能となった。これらに、赤色斑粒を含む第3図36や、アバタを生ずる第2図34、第3図41(写真4)といった外来系土器が極少量加わるのである。

関連して、混和材の粒径についても比較してみよう。当該資料群では径1mm未満と極めて小さく、かつ、その混和率も3%未満の仮称「精製土タイプ」が主流を占めている。もっともその一方で粒径2～3mm程度、混和率20%前後の仮称「粗製土タイプ」も一定量抽出できた。これらを、前段まで述べてきた各類型等と対比させるならば、有文の谷尻系深鉢と、口唇部直上を刻む無文系K類型深鉢の一部に、粗製土タイプが比較的目立つ傾向が認められる。もっとも、有機物や赤色斑粒を混和する土器以外は全て領家帯起源であり、該期の船ヶ谷遺跡では、日常レベルでの交流範囲が瀬戸内西～中部の内で済まされていたものと想定できよう。

最後に色調である。ここでは「黒褐～褐灰色(10YR3/1～10YR4/1)タイプ」、「灰黄褐～にぶい黄橙色(10YR4/2～10YR7/3)タイプ」、「灰褐～にぶい褐色(7.5YR5/2～7.5YR5/3)タイプ」、「にぶい赤褐色(5YR5/3)タイプ」、そして「暗赤灰色(2.5YR3/1)タイプ」の5パターンを把握できている<sup>10)</sup>。うち「黒褐～褐灰色タイプ」を示す個体が圧倒的に多い。これを船ヶ谷深鉢の標準色と認識しておこう。一方で、有文の谷尻系や一部の無文系K類型深鉢に特徴的な「にぶい黄橙色タイプ」、「にぶい赤褐色タイプ」は、先の胎土混和率や、粒径の特異な個体と一致する傾向にあり、ともに“外

	有文深鉢・鉢				無文深鉢・鉢		小計
	谷尻系	前池系	無刻目突	刻目突帯	屈曲	砲弾	
口唇無文			1(0.7%)	1(0.7%)	5(3.5%)	17(11.8%)	24(16.7%)
口唇上刻	8(5.6%)	11(7.6%)	6(4.2%)	24(16.7%)	21(14.6%)	22(15.3%)	92(63.9%)
口縁内刻	10(5.8%)	3(2.1%)	2(1.4%)	3(2.1%)	8(5.6%)		26(18.1%)
口唇外刻	1(0.7%)				1(0.7%)		2(1.4%)
小 計	19(13.2%)	14(9.7%)	9(6.2%)	28(19.4%)	35(24.3%)	39(27.1%)	144

第4図 船ヶ谷遺跡出土深鉢の個体数識別調査結果

第4図は、その成果を集計したものである。同図から、船ヶ谷遺跡の深鉢は刻目突帯文約19%を除けば、口唇を刻む無文深鉢・鉢が約36%と最も多く、次いで、口唇を刻まない無文深鉢・鉢が約15%を占めることを把握できた。参考までに、併行期の代表事例である、岡山県真庭市谷尻遺跡の谷尻式標式資料、No.130土坑出土土器群群では、全縄文土器深鉢中に占める有文の割合が9割に達すると報告されている(平井(勝)1988,p21)。つまりこのことからも、施文率をめぐる東西間の格差は極めて大きいと理解できるだろう(第4図)。

#### 4. 成果とまとめ

本稿では、これまで未報告であった無文系粗製深鉢の図示公開に加え、新たに船ヶ谷式深鉢の本来のセット関係を検討してきた<sup>12)</sup>。結果、その大多数が頸部の屈曲する I -1-⑧・⑨形ないしは I -2-⑥～⑧形(幸泉2017,p60)に帰属する点を指摘できた。つまり、これらの一群が山陰中部におけるStage22～23(概ね晩期中葉後半)の粗製深鉢群と幾つかの点で通底する事実を、明らかにできたのである(幸泉2019b)。ちなみに内縁刺突の深鉢は全体の約18%であった。

つぎに製作技法の再評価を行った。今回、学生達の分析により、当該土器群の物理的移動の大部分が領家帯、すなわち瀬戸内海沿岸域のうちに留まることを見出せた点は成果と見做せよう。上記内容はまた、2019年12月に幸泉と岩田が別途発表した深鉢・鉢底部の検討結果とも矛盾するものではない(幸泉・岩田2019)。換言すれば、東北部九州や山陰中部、あるいは南四国や東南四国側からの土器移入が例外的存在に留まっていたことも示唆しよう。成形法に関しても、改めて内傾接合が圧倒的主体を占めることを客観的に示すことができた。さらに精査の結果、今回極少量ながらも第1図2や第2図18・34、第3図41のように外傾接合を示す個体も確認できている。これらは、第1図2を除いて胎土色調の面でも異色であり、西～中部瀬戸内圏外からの移入を想定せざるを得ないだろう。

なお、これから課題となるが、瀬戸内沿岸域を確固たる基盤に据えつつも、上記の如き複数地域間を介した製作伝統の混淆が意味するところについても、今後、分析の対象を拡充させることで、一層の究明を図る必要があろう。西日本各地でほぼ一斉に“刻目突帯文”を享受し始めたこの時期、土器文様の斉一化とは裏腹に、非視覚的属性レベルでの製作技法の多様性と、地域的独自色が存した事実を再評価しなければならない。周辺各地の該期資料群を今一度、有意の視座から入念に観察し、比較し直す姿勢こそが求められているのである。

(2020年4月28日)

来系”的可能性を強く示唆している。

以上の深鉢・鉢口縁部片の観察所見に加えて、最後に既存の報告済み資料群(阪本編1984、栗田編2000)を加え、出土深鉢・鉢口縁部片全点の個体数識別調査も実施してみた<sup>11)</sup>。

## 謝辞

本稿作成にあたり、愛媛県教育委員会および愛媛県埋蔵文化財センターのみなさんからは全面的なご協力を賜った。末筆ながら、記して感謝の意を表したい。

## 註

- 1) 愛媛県教育委員会「30 教文第250号」ほか認可済。なお、このうち未公開の底部片の一部については、その学術上の重要性を鑑み、既に先行して公表を済ませたところである(幸泉・岩田2019)。なお、本稿では2-(4)の成形、調整、胎土、色調に関する考察を愛媛大学法文学部生の岩田・奥田・白鳥・近藤が執筆し、その他は、学生たちの意見を汲みつつ、幸泉が分掌、統括した。
- 2) 幸泉2014文献p94の第2表※1を参照。
- 3) 注記からは、まず当該資料群の大多数が1975(昭和50)年5月に出土したことが判る。また層位地点に関しては「3(又はⅢ)層(上)」の表現が圧倒的多数を占めることが判明した。左記以外では「3(又はⅢ)層上灰中」、「2(又はⅡ)層(上)」、「灰(色)砂中」、「1-」、「雑」などの注記もみえる。ただし、これらの表記は報告書とは合致しない。阪本編1984年報告書のP5には「第Ⅳ層は黒褐色含灰粘土層」の記載があり、注記の「3(又はⅢ)層(上)」がこれに該当するとみられる。ただ、同報告書P9の土器解説冒頭では別途「河川部から出土する夥しい量の土器」との表現が窺え、「河川」を示す注記が全く見当たらない点が腑に落ちない。これらの解説については、仮に判明した場合は、当該シリーズの続篇以降で隨時報告したい。
- 4) 西日本内部を広域比較するにあたり、2017年以降、筆者は複雑多岐にわたる地方型式名を多用する代わりにStage 1~28の統一基準を設け、表現することを提唱している(幸泉2017・2019abほか)。
- 5) 2018年5月12日に島根県出雲市の県立古代出雲歴史博物館で開催された第29回中四国縄文研究会の初日に、幸泉が口頭で当該“アバタ土器”(第3図41:写真4)の存在を速報している(幸泉2018)。
- 6) 愛媛大学法文学部生、近藤拓弥の調査結果に基づく。
- 7) 愛媛大学法文学部生、奥田七夏の調査結果に基づく。
- 8) 愛媛大学法文学部生、白鳥嶺の調査結果に基づく。
- 9) 愛媛大学法文学部卒業生、岩田堯之の調査成果に基づく。
- 10) 小山正忠ほか編2014『新版標準土色帖』36版、(株)日本色研事業より分析。同じく愛媛大学法文学部卒業生、岩田堯之の調査成果に基づく。
- 11) 同一個体片は全て1点としてカウントした。
- 12) もっとも既に幸泉が谷尻系土器群の検証のなかで論述しているように、当該資料群はStage23(晩期中葉後半)を主体としつつも、連続する前後時期の資料を一定量含んでいる(幸泉2020)。セット関係の詳細については今後の資料増加を待って、再度議論を深める余地が残されている。

## 参考文献

- 犬飼徹夫2015「四国西北部・西南部での縄文土器型式編年(5) -縄文晚期土器について-」『愛媛考古学』21、愛媛考古学協会 pp. 9-44
- 栗田茂敏編2000『大渕遺跡-1・2次調査-』松山市埋蔵文化財センター
- 幸泉満夫2014「博物館資料学の新たな可能性-地域に眠る出土文化財の新たな活用システム構築に向けて-」『法文学部論集 人文学科編』第37号、愛媛大学法文学部 pp.87-126
- 幸泉満夫2017「縄文文化解体期をめぐる土器資料群の研究1-北部九州沿岸域における“文様のない粗製深鉢群”の再検証-」『古文化談叢』第79集、九州古文化研究会 pp.57-118

幸泉満夫2018「縄文後晩期における九州系土器の中国・四国地方への波及」『中四国の外来系土器』第29回中四国  
縄文研究会島根大会資料集pp.23-32

幸泉満夫2019a「谷尻式土器の研究(上)」『縄文時代』第30号、縄文時代文化研究会 pp.111-128

幸泉満夫2019b「縄文文化解体期をめぐる土器資料群の研究2－山陰中部域における“文様のない粗製不可AB地  
群”の再検証(前篇)－」『古文化談叢』第83集、九州古文化研究会 pp.1-45

幸泉満夫・岩田堯之2019「愛媛県周辺域における未公開縄文土器群の研究(3)－文化財保管庫に埋もれていた博  
物館資料の再整理を通じて－」『人文学論叢』第21号、愛媛大学人文学会 pp.143-150

幸泉満夫2020「谷尻式土器の研究(下)」『縄文時代』第31号、縄文時代文化研究会 pp.79-101

阪口 隆1995「第3章 縄文時代」『持田町3丁目遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター pp.13-44

阪本安光編1984『松山市・船ヶ谷遺跡』愛媛県教育委員会

中野良一編2005『福成寺遺跡・旦之上遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター

平井 勝1988「岡山県における縄文晩期突帯文土器の様相」『古代吉備』第10集、古代吉備研究会 pp.9-34

平井泰男2009「岡山県における縄文時代晩期前半の土器様相」『研究報告』29 岡山県立博物館 1-34頁

宮本一夫1989「第5章 道後平野における弥生時代開始期の動向」『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調  
査室 pp.77-93

脇坂光彦1976「芦品郡新市町神谷川遺跡の資料」『地歴部誌』第4号 府中高校生徒会地歴部 pp.6-22

### 挿図版典拠

第1～3図 ;幸泉指導のもと考古IIゼミ生実測、博物館実習I(文系)履修生採拓、幸泉・岩田編集清淨  
第4図 ;幸泉作成。写真1～4 ;幸泉撮影・レイアウト(掲載許可済)